2020 年 12 月

今月の新着図書から

ハイデガー『存在と時間』8，中山元訳（光文社古典新訳文庫，2020 年）

高等科図書主任
林　知宏

マルティン・ハイデガー（1889-1976）は，20 世紀最大の哲学者と称される．そして彼が 1927 年に発表した『存在と時間』は，やはり 20 世紀最大の問題作という評価を不動のものとしている．多くの人がこの難解な著作に挑戦し，研究書や解説書は星の数ほどある．今回，光文社古典新訳文庫から刊行されてきた中山元氏による翻訳が完結した．この翻訳は，細谷貞雄訳（ちくま学芸文庫）全 2 巻，熊野純彦訳（岩波文庫）全 4 巻などに比べ分量が倍ほどもある．それだけ全体を通読するのに労力を必要とする．ただそれには理由がある．本文に対してほぼ同量の頁数をとって，翻訳者が逐次的解説が付しているからである．まず虚心に本文を読む．そして後半部の解説を読みながら再び本文をふりかえる．この繰り返しによって，思索への推進力が保たれる仕組みとなっている．

記したように，私は最初に細谷訳，次に熊野訳，そして中山訳と読み継いできた．平易さは後になればなるほど増していったように思う．カント『純粋理性批判』のときは，逆に中山訳から熊野訳へと進んだ．カントの場合，中山訳に何か信をおけない気持ちがあったからだ．いずれにしてもカント以上にハイデガーの議論は，容易に腑に落ちることがない．そうした作品の読み方として，翻訳を「あれこれ試しながら」というのは邪道なのかもしれない．翻訳はあくまで 1 次接触のためにある．特に外国語の文献の場合，語学の学習を通じて原書に取り組むのが，たぶん独自の理解へと進む唯一無二の方法なのだろう．

ハイデガーの論理は意外性に富んでいる．「存在一般」の意味を追究するのだが，そのために「存在了解」という現象を画定するという．そしてその「存在了解」は，「現存在」の「存在機構」に属するとされる．そして「現存在」の構造は「時間性」の「気遣い」の可能性を根源的に問う必要がある．ところが，「気遣い」の時間的解釈は，「配慮的な気遣い」をする「世界内存在」の「時間性」を証することで明らかになるという．ハイデガーは，主観と客観という単純な二分法を捨てている．問題をつねに別の問題にずらしながら，かつ（「」で包んだような）新たな用語・概念を導入しつつ，循環論法に陥る危うさを切り抜けようとしている．哲学史の伝統を押さえつつ，アリストテレス以来の議論が近世のデカルト等によって認識論へとシフトしていった経緯も踏まえ，非常にラジカルな問題設定に挑戦している．とにかく刺激的であることは確かだ．ただしこの著作自体は未完で終わったことも忘れてはならない．「根源的な事柄を語る言葉ほど弱いものはない」とはパスカルの至言である．多くの人々を悩ませつつも，新たな思索の契機を提供してきた著作にふれ，哲学的思考とはかくあるものと体験してみるのはどうだろうか．